

# キャクストンのヘマカ

## —『狐レイナード物語』の一場面の考察—

檜 枝 陽 一 郎

### 1.

狐のライナールトを主人公にした中世オランダ語による一連の動物叙事詩において、登場する動物たちの多くは、一定の親族関係のなかに位置づけられている。たとえば、ライナールトとその親族である穴熊のグリムベルトはつねに叔父と甥の関係にある<sup>1)</sup>。狐と穴熊という異なる二種の動物が親族同士であるというのはよく考えれば奇妙であるものの、この場合は物語上の舞台設定だと考えられるだろう。物語は冒頭から古ゲルマン法に則った裁判形式によって進行する。古ゲルマン法における裁判は、現代とは異なり一族対一族の争いであって、一方の訴えに対して他方が弁護するという形で進められる。一族は結束して、訴える側である原告となったり、また弁護する側に回ったりする。いわゆる血族共同体(独語 Sippengemeinschaft)としての一族なのである。そう考えると、狐と穴熊は同じ一族に属しているので、お互いを「叔父」「甥」と呼び合っているのも頷けるだろう。同じ一族に属している猿のメルテンやその妻ルーケナウも、ライナールトのことを「甥」と呼んでいる。

その一方、「叔父」や「甥」といった親族名称は、対抗する別の一族の成員に対しても呼びかけとして用いられる。時には親しみを込めて、また場合によっては相手に皮肉を込めて声をかけるのである。ライナールトは、敵であるにもかかわらず雄猫ティベールトに「ティベールト、わが親愛なる甥よ」と挨拶し、熊のブルーンには「ブルーン叔父さん」と声をかけ、その一方熊は狐を「ライナールト、甥よ」と呼びかける<sup>2)</sup>。ライナールトの仇敵である狼イセグリムにさえ、狐は「叔父さん」と呼びかけ、逆に狼はライナールトに「甥よ」と話しかける<sup>3)</sup>。

このように一定の親族関係の枠組みのなかで、それぞれの動物が親族名称を用いて相手に呼びかける形で物語が進行すると、随所に「叔父」や「甥」あるいは「叔母さん」といった呼称が出現することになる。しかしそうだからといって、写本の写し手や印刷業者が「叔父」と「甥」の関係を逆転させて書き誤るといったミスは滅多にない。たとえば7809行から成る韻文写本の『ライナールト物語』において、「叔父」と「甥」を逆転させて書き誤った例は一例しかない<sup>4)</sup>。それほどこの関係は表記の上で安定していると言えるだろう。印刷術が発明されて狐をめぐる叙事詩が他国語に翻訳されて出版された場合にも、「叔父」と「甥」の関係はほとんど間違えられることがない。

十五世紀の第2四半分期に成立したと思われる韻文写本の『ライナールト物語』は<sup>5)</sup>、その後印刷術の発明によって印刷本の『狐ライナールト物語』となって、1479年にオランダのゴータで印刷業者ヘラルト・レーウによって出版された。不特定多数の読者を想定しているのも、この印刷本は読み易い散文に翻案されて出版された。当時は出版業者の国際的なネットワークが存在したようで、その関係を介してイギリス最初の印刷業者とされるウィリアム・キャクストンが1481年にウェストミンスターで英語版の『狐レイナールト物語』を翻訳して刊行している<sup>6)</sup>。中世オランダ語に

よる『狐ライナールト物語』とその英訳本である『狐レイナールド物語』との関係については、オランダ語側および英語側双方の研究者によって考察が進められてきた。そうした研究の中で、キャクストンが先述した「叔父」と「甥」の関係を誤訳して、つぎの2.に示すようにキャクストンのヘマ (A blunder) だとされる箇所が『狐レイナールド物語』に一つある<sup>7)</sup>。はたしてそうなのか、もしヘマならそれがどのような経緯で生まれたのかを検証するのが本論の目的である。

## 2.

物語のはじめに、狐ライナールトが獅子王ノーベルの諸侯会議で多くの動物たちから告訴される。狼のイセグリムが、自分の妻をライナールトが暴行したと訴え、つづいて子犬のコルトワが腸詰めを盗まれたと提訴し、<sup>ビーバー</sup>海狸のパンツァーが、ライナールトが兎のキワールトに対してはたらいた狼藉を訴え出る。狐の甥である穴熊グリムベルトが、それに対して逐一反論を加えてライナールトを弁護しようとする。グリムベルトが弁護を巧みに行っていたと思っただけにその時に、雄鶏のカンテクレールがコッペという、ライナールトが首を噛みちぎったために死んだ雌鶏を担架に担いでやってくる。ちょうどその場面が、原本である『狐ライナールト物語』では以下のように記されている。

『狐ライナールト物語』

Recht onder/dese woerde dat grymbert aldus van sinen oem/stonde ende predicte So saghén si neder ten dale waert/ende saghén daer comen geuaren Cantekleer die haen met/eenre baer met eenre doder hennen ende die hiet coppe dye/reynaert den hals of gebeten hadde Ende dit moestmen nv/den coninc te weten doen 11, 30-12, 2<sup>8)</sup>

「グリムベルトが叔父を弁護して陳述しているまさにその時、谷の下方を見ると、雄鶏のカンテクレールがコッペという、ライナールトが首を噛みちぎったために死んだ雌鶏を担架に担いで来るのが見えた。王様にそうして事情を知ってもらうことになった。」 211, 17-212, 2<sup>9)</sup>

それに対して、検証の対象とする予定の、これに対応する 1481 年に成立した英語訳『狐レイナールド物語』には以下の記載がある。以下これをキャクストン訳とする。また、参考までに対応する箇所について、サンズによる現代英語訳と木村建夫氏による日本語訳を挙げておく。

キャクストン訳

Thus as grymbert his eme stode and preched these wordes/so sawe they comen down the hylle to hem chauntecler the cock and brought on a biere a deed henne of whom reynart had byten the heed of/and that muste be shewed to the kynge for to haue knowleche therof. 10, 16-20<sup>10)</sup>

サンズ現代英語訳

Thus as Grimberty, his eme, stood and preached these words,/so saw they come down the

hill to them Chanticleer the/cock, and brought on a bier a dead hen, of whom Reynard had/ bitten the head off and that must be showed to the king for to/have knowledge thereof. 51, 17-21 <sup>11)</sup>

木村建夫訳

「こう言いながらグリムベルトがおじさんの弁護をして熱弁をふるっているところへ、おん鶏のチャンテクレールが山を下って来るのが見えました。レナルドに首を喰いちぎられて死んだめん鶏<sup>ひつぎ</sup>を棺台に載せて、どうしても王様にこれを見せて、知ってもらおうと運んできたのです。」  
16, 1-4 <sup>12)</sup>

まず、もとになった『狐ライナールト物語』とキャクストン訳を比較すると微妙な違いがあることが判明する。問題となっているのは上記の文例において下線を施した部分である。その部分は『狐ライナールト物語』では従属節のついた前置詞句となっている。グリムベルトが叔父を弁護しているという文意ははっきりしているとはいえ、それをこの構造からどう導き出すのかという点が難しい。onder dese woerde「この発言の時」という前置詞句に、その内容を説明する従属接続詞の dat (独語 dass、英語 that)が続いているところから、grymbert aldus van sinen oem stonde ende predicte という文は従属節または副文であるのがわかる。文頭の Recht は「まさに」を意味する副詞である。問題の核心は、van sinen oem (独語 von seinem Oheim) という前置詞句をどう解釈すればよいのかという点と、stonde ende predicte という ende (独語 und、英語 and) で結ばれた二つの定動詞をどう解釈すればよいのかという二点である。

他方、キャクストン訳を見ると、ほぼ逐語的に訳されているものの、前述した原文の van sinen oem から前置詞の van が省略されてたんに his eme とされている。そのためサンズは、これを主語のグリムベルトと同格に置かれた名詞と解釈して、「彼の叔父であるグリムベルト Grimbert, his eme,」と訳している(上記の訳参照)。ところがこう解釈すると、狐と穴熊との関係はライナールトがグリムベルトの叔父であるという物語のなかの安定した関係と全く逆になってしまう。したがってサンズはこの一節に注をつけて「Grimbert, his eme. キャクストン側のヘマであって、ライナールトがグリムベルトの叔父である。キャクストンは、ゴータ版の van sinen oem (concerning his uncle) を同格として訳してしまった。」と解説している<sup>13)</sup>。すなわちサンズは自分の誤訳ではない、誤訳の責任はキャクストンにあると主張している。またブレイク版は現代英語訳ではなく、たんに1481年のキャクストン版をそのまま刊行したにすぎないものの、注でこの箇所について、グリムベルトが彼の叔父について話しているとしたオランダ語をキャクストンが誤訳したのだと注解している。「キャクストンがあたかも穴熊がライナールトの叔父であるかのようにしたのである。しかしその関係は反対である。」のだという<sup>14)</sup>。

それに対して木村建夫訳は、前二者とは異なり、his eme をグリムベルトの同格とは解せず、グリムベルトがおじさんの弁護をしていると訳し、注を付している。しかしその注を見ると、そう訳した根拠は記されておらず、単なる推測によるのが判明する。注にはこう述べられているからである。「grymbert his eme stode (10/16) について、ゴータ版の van sinen oem concerning his uncle を同格『彼のおじであるグリムベルト』ととったキャクストンの誤訳とする説が多いが、『おじを弁護する』と読めないか。」<sup>15)</sup>

## 3.

議論の対象となっている箇所とそれに関するこれまでの解釈は上に見た通りである。それはまた、『狐ライナールト物語』を翻訳して刊行した筆者自身にも関係することであるので、まず当該の箇所をどう訳し、その際の根拠をどこに求めたのかを明らかにして、それから次の考察に進みたい。

前掲の『狐の叙事詩』で示している「グリムベルトが叔父を弁護して陳述しているまさにその時」という訳の根拠としたのは以下の通りである。まず、ende より前にある van sinem oem stonde を一つの意味をなすまとまりとして捉え、そこに「叔父を弁護して」という訳を当てた。前置詞の van は「～に関して、～について」の意味だと解した。stonde (staen の直説法過去三人称単数形) の意味については、『中世オランダ語辞典』(MNW)における当該項目の意味に拠った。たとえば辞典は、項目(5)にさまざまな法的表現に見られる staen の意味と用法を挙げており、そのなかに *In enes worde staen* 「誰かの弁護人として登場する」という表現があり、しばしば裁判言語で用いられたという<sup>16)</sup>。また、項目(6)にはさまざまな前置詞と結びついた表現が掲載されており、そのなかに *staen te* 「保証する *instaan voor* ~」あるいは *staen vore* 「擁護する *opkomen voor* ~、保証する *instaan voor* ~」が挙げられている<sup>17)</sup>。原文と辞書の記載とが厳密に一致するわけではないものの、辞書にある説明に沿って van sinen oem stonde はおそらく「擁護する、保証する」を意味しているのだと解釈し、「叔父を弁護して」と訳しておいた。と同時に、原文と辞書の内容がまったく一致しているわけではないので、文意は合っていると思いつつも、少し違和感を感じていた。

ところがその後、まったく異なる解釈の可能性に思い当たり、その解釈の方が従来のものより適切であるのが判明した。それは ende で繋がれた二つの定動詞に関わるもので、Stoett はかつて中世オランダ語の統語論を扱った著書の述語 (praedicaat) の項目においてこう説明していた。「われわれが *hij stond te denken*、*hij zat te eten*、*hij lag te slapen* と言うところを、中世オランダ語では通常 *te* をともなう不定詞を用いず、ende で繋がれた定動詞の形を用いる。今日でも口語において、とくにフランドルで使われている文構造である。」<sup>18)</sup> Stoett はこう説明した後に、*Ic sta ende wachte.*、*Hij stont ende dachte.*、*Tibeert stont ende gal* など多くの例文を挙げている。また同じ箇所には、英語の *to lie sleeping* や *to stand*、*to sit looking* を参照するよりの指摘もある。

引用文にある現代オランダ語の *hij stond te denken*、*hij zat te eten*、*hij lag te slapen* という構文は、やや昔のオランダ語の統語論において述語的修飾語 (オランダ語 *bepaling van gesteldheid*、独語 *Prädikativ*、英語 *predicative adjunct*、仏語 *complément prédicatif*)<sup>19)</sup> の一つとして説明されているものである。den Hertog は、述語的修飾語をまず意味の上から二つのグループに分ける。第一のグループは、述語的修飾語が述語の一部として、文中に言挙げされた人物ないし事物について、その様態ないし状況、作用を表すもので、とくに文における主語に関係するものだという。また、曖昧さがない場合は、文中に現れる名詞にも関係するとされる。いま一つのグループは、知覚ないし思惟、使役 (*waarnemen*、*denken*、*doen*) の結果として様態ないし状況、働きを表す述語的修飾語である。本論で論じている *te* をともなう不定詞によって修飾する型は、第一のグループの第IV型に分類されており、それぞれの型を例文で示すと以下のようなになる<sup>20)</sup>。

I 型 (副詞によって修飾する型)

*Dronken heeft hij het gedaan en nuchter moet hij het boeten* [彼は酔っ払ってしたことを酔い

が醒めたときに償わねばならない。]

*Hongerig kwam Bruintje door het gat naar binnen, maar zat kon hij er niet meer uit.* [小ブ  
ルーンは空腹で穴の中に入ったものの、満腹ではそこから出られなくなった。]

Ⅱ型 (分詞によって修飾する型)

*Brommend gaf hij toe.* [ぶつぶつ言いながら彼は認めた。]

*Half bevroren kwamen wij thuis.* [半分凍えてわたしたちは帰宅した。]

Ⅲ型 (名詞によって修飾する型)

*Als vader moet hij daarvoor zorgen.* [彼は父として世話をしなければならない。]

*Hij stond er bij als lijdelijk toeschouwer.* [彼は消極的な傍観者として立っていた。]

Ⅳ型 (不定詞によって修飾する型)

*Hij stond te praten (=pratende)* [原文のまま]. [彼は話しながら立っていた。]

*Hij zat te lezen.* [彼は読みながら座っていた。]<sup>21)</sup>

以上の文例から明らかなように、修飾する語が副詞であれ、分詞であれ、名詞また不定詞であつても、その意味が主語と関連していることがわかる。第一グループの述語的修飾語というのは、述部によって表現された作用を介して修飾するものの、それが同時に主語あるいは直接目的語に関係することをいう<sup>22)</sup>。その意味で一つのグループをなすと考えられ、*te*をとともなう不定詞による文構造もこの一種だというのである。日本語では「彼は考えながら立っていた。」あるいは「彼は立って考えていた。」ぐらいの意味となるだろう。

ただし最近では、オランダ語の文法書はこうした文構造における *staan*、*zitten*、*liggen* を *te* とともなう助動詞だと見なしている<sup>23)</sup>。重要なのは、*staan*、*zitten*、*liggen* といった動詞本来の意味がときに「～している、～に従事している ( *bezig zijn met* )<sup>24)</sup> という意味に弱化する場合があることである。また、これらの助動詞は、本来の意味で用いられたときも、弱化した意味で用いられたときも、本動詞によって表された作用が継続していることを示すものとされる (*duratief aspect*)<sup>25)</sup>。そうすると前述した三つの文はそれぞれ次の意味となるだろう。

*Hij stond te denken.* 「彼は考えながら立っていた。」「彼は立って考えていた。」「彼はずっと考えていた。」

*Hij zat te eten.* 「彼は食べながら座っていた。」「彼は座って食べていた。」「彼はずっと食べていた。」

*Hij lag te slapen.* 「彼は眠って横になっていた。」「彼は横になって眠っていた。」「彼はずっと眠っていた。」

三通りの訳を示したのは、本動詞の意味が弱化するにしたがって、動作の継続がより強く表現されていくさまを示すためである。これら本動詞の意味が弱化している場合があるとはいえ、主語がどのような姿勢をとっているかによって、*staan* [立っている] ないし *zitten* [座っている]、*liggen*

[横になっている] が使い分けられる<sup>26)</sup>。Stoett が指摘したのは、こうした現代オランダ語の構文が、中世オランダ語では *Ic sta ende wachte.*、*Hij stont ende dachte.*、*Tibeert stont ende gal* のように二つの定動詞が *ende* によって繋がれた形で現れるということであった。すなわち、定動詞のうち第一のものが姿勢を表し、第二の定動詞が作用を表現する<sup>27)</sup>。そう考えると、上の中世オランダ語の文例はつぎのように訳せるだろう。

*Ic sta ende wachte.* 「私は待ちながら立っていた。」「私は立って待っていた。」「私はずっと待っていた。」

*Hij stont ende dachte.* 「彼は考えながら立っていた。」「彼は立って考えていた。」「彼はずっと考えていた。」

*Tibeert stont ende gal.* 「ティベールトは叫びながら立っていた。」「ティベールトは立って叫んでいた。」「ティベールトはずっと叫んでいた。」

ちなみに最後の例は、十三世紀中葉に成立した『狐ライナールト譚』の1226行に見られるもので、最近出版された英訳では *Tybeert stood screaming* と訳されている<sup>28)</sup>。

さらに Stoett はつぎのように指摘している。「第二の動詞に規定されるものが、繋いでいる *ende* の前に来ることも珍しくない。あたかも二つの動詞が一つの単位を形成して、修飾されたものが全体としてその結合単位に属しているかのようである（下線は原著者による強調、もとは傍点）。」<sup>29)</sup> 前例と同様に、やはり多くの文例が挙がっており、そのいくつかを紹介する。ただし具体的な出典は Stoett に明示されていない。

*Amand, die sijn ghetiden sat ende las* 「座って時課を読んでいたアマンド」<sup>30)</sup>

*Men sal de selve rente zitten ende betaelen drie daghe lanc.* 「おなじ賃料を三日間払い続けるべし。」<sup>31)</sup>

*Doe hi dit stont ende seide* 「そこで彼は立ってこう言った。」

最初の文例では、*ghetide* [時課] は *las* [lesen の直説法過去形] の直接目的語であるにもかかわらず、*sat* [sitten の直説法過去形] の前に入れられている。二つの動詞が一つの単位を形成しているようであり、またそう見なさねばならない。第二の文例も同様で、*de selve rente* は *betaelen* [支払う] の直接目的語以外にあり得ないにもかかわらず、*zitten* の前に位置している。とくに Stoett も指摘するように、この構文が頻繁に使われた結果、第一の動詞の意味が希薄になり、*liggen ende* は反復や継続を表すのに用いられたという<sup>32)</sup>。第二の例では「*drie daghe lanc* 三日間」という継続を表す語があるので、*zitten* の意味は明らかに希薄化して継続を意味しているので、「払い続ける」という訳が「座って払う」という訳よりも適切であろう。第三の例も同様で、*dit* [これ] は *seide* [seggen] の直接目的語である。

以上のような構文があることを前提に、キャクストンが翻訳にあたってヘマをやらかしたという原文をもう一度あげてみる。

Recht onder dese woerde dat grymbert aldus van sinen oem stonde ende predicte

dat 以下につづく従属節を、前述した文構造にあてはめて検討すると van sinen oem が prediken [説教する、熱弁をふるう] の前置詞目的語であることが明らかとなる。なぜ直接目的語ではなく前置詞目的語であるのかは、動詞 prediken 側の事情による。ラテン語の praedicare [告知する、説教する] に由来するこの動詞には、中世オランダ語では一つの特徴がある。『中世オランダ語辞典』(MNW)によれば、prediken は他動詞であるものの、ほとんどの場合で目的語が省略されて、それによって一見すると自動詞のように見えるという<sup>33)</sup>。ただ、同時に引用されている文例には目的語をとるものもあり、一概に目的語が省略されるとはいえない。本論の関心に掛かる二つの文例をあげて検討したい。

Ic stont en predicte een sermoen binnen Ephesen Sev. Blisc.<sup>34)</sup>

[私はエフェソのなかで立って演説を行った。]

本論で一体化した二つの動詞だと見なした用例 stont en predicte がここでも同じ形で見られるのは特徴的である。演説とか説教とかは当然ながら立って行うものであるので、第一の定動詞が姿勢を表し、第二の定動詞が作用を表してこうした表現をとっていると考えられる。

Dat een clerc was die veel plach te scrivenne ende te prekenne vander maecht Mariën  
Marialeg. 2, 91.<sup>35)</sup>

[日頃から処女マリアについて沢山ものを書いて説教していた書記がいたこと]

前述したように、van sinen oem が prediken [説教する、熱弁をふるう] の前置詞目的語であるという傍証がここにある。「処女マリアを説教する」ならば、prekenne die maecht Mariën のように直接目的語に置くであろうが、それでは意味のある文とはならない。したがって「処女マリアについて説教する」と表現したい場合、前置詞の van を用いるのである。その意味で、van sinen oem を concerning his uncle と解釈した Sands は正しいと言えるだろう。とすれば、先にあげた問題の箇所はつぎの意味になるはずである。

Recht onder dese woerde dat grymbert aldus van sinen oem stonde ende predicte

[グリムベルトが立って叔父についてこう陳述しているまさにその時]

あるいは stonde の意味が稀薄化してより継続を表現していると解釈すれば、「グリムベルトがずっと叔父についてこう陳述しているまさにその時」とも訳せるだろう。

#### 4.

原文の意味が確定したところで、同様の文例をほかに『狐ライナールト物語』に探してみると、以

下の五例を抽出することができた。少数ではあるものの重要な手がかりとなる。

第一の例は物語の冒頭にある諸侯会議に見られる。子犬のコルトワがライナールトに腸詰めを盗まれたと王様に訴え出たのに対して、雄猫のティベールトが反論して、腸詰めはもともと自分のもので、風車小屋にいた粉挽き人から盗んだものと主張した場面である。その箇所を前後の文と合わせて引用する。

Al en claghe ic des/niet. die worste die was mijn. want ic had se bi nacht ge/wonnen in eenre moelen. die molenaer lach ende sliep. 8, 24-26 (スラッシュは改行を示す。下線によって当該箇所を明示した。ともに筆者による。)「訴えたりしますが、腸詰めはわたしのものでした。わたしが夜中に風車小屋でせしめたからです。粉挽き人は横になって眠りこけていました。」208, 10-14 <sup>36)</sup>

キャクストン訳

how be it that I complayne not/that pudyng was myne/For I hadde wonne it by nyghte in a mylle/The myllar laye and slepe 8, 2-4 <sup>37)</sup>

第二の例は、ブルーがライナールトに騙されて、二つに割った木の間に挟まってしまい、十字架をもった司祭とその妻ユーロッケ夫人も含めた多くの村人から命を狙われて袋叩きにされ、痛めつけられる場面である。

Sy sloeghen ende si staken hem al dat si conden Bruyn/die sat ende suchtede ende steende ende hi moest nemen datmen/hem gaf 21, 19-21「みながあらん限り突いたり刺したりした。ブルーはずっと嘆息して呻いていたが、浴びるものをそのまま頂戴するほかなかった。」222, 1-2  
キャクストン訳

they smote and stacke hym al that they cowde/bruyn the beere satte and syghed and gromed/and muste take suche as was gyuen to hym 17, 9-11

第二の例では、もう一つ定動詞が加わって定動詞が三つ繋がっているように見えるものの、文の構造は定動詞二つの場合と同じだと見なせよう。上の二つの例では、中世オランダ語の原文をそのまま英語に引き写しているのがわかる。両言語は同じゲルマン語に属する言語なので、そのまま逐語的に引き写せば事足りる。キャクストンがその際、反復ないし継続を意図していたのか、あるいはたんに接続詞の and による並列の意味だけを意図していたのかはよくわからない。Stoett が指摘しているように、英語でも同じ構造によって反復ないし継続を表現できるからである <sup>38)</sup>。

つぎの第三の用例は、穴熊のグリムベルトがライナールトを宮廷へ呼び出すために、根城のマルペルデュースへやって来たときの場面である。ライナールトは、その家族とグリムベルトといっしょに若い二羽の鳩を食べてから寝床に着いたものの、心配で眠れなかった。

Reynert sijn wijf ende sijn kinderen die ghin/ghen oeck slapen Mer reynert dien waren die sinnen also/swaer dat alle den nacht lach ende suchtede. ende sorghede/ende bedacht raets hoe dat hi hem seluen ontsuldighen/mochte 78, 11-15「ライナールトとその妻、子供たちも就



寝したものの、ライナールトの気分は重く、一晩じゅう横になったままため息をつき、心配で、どうすれば自分の潔白を証明できるか妙案を探っていた。」283, 3-4

キャクストン訳

the foxe/hys wyf and hys chylchildren wente alle to slepe/But the foxe was al heuy/and laye.  
sighed and sorowed how he myght beste excuse hym self 57, 29-32

この文例を見ると、原文は lach ende suchtede. とあって、suchtede [ため息をつき] のあとにピリオドが打たれているので、その次の sorghede/ende bedacht raets とは文が切れている。suchtede までが dat に支配された従属節で、それにつづく ende sorghede/ende bedacht raets hoe hi hem seluen ontsuldighen/mochte [心配で、どうすれば自分の潔白を証明できるか妙案を探っていた。] は別の文だと考えるのが適当である。しかしキャクストンはそう解釈せずに、すべての定動詞が並列に並んでいるものと考えて laye. sighed and sorowed と訳した。この事実は、キャクストンが問題となっている中世オランダ語の文構造を理解していなかったか、理解していたとしても無視できるほど些細なものだと考えていたことを物語る。

とはいえ次例を見る通り、staen [立っている] が stont ende ~ (英語 stood and ~) の形で第一の定動詞となっている場合、キャクストン自身もこれを奇妙な文構造だと見なしていたのが明らかである。逐語訳をせずに、意識しているからである。中世オランダ語の文構造を理解していなかったせいで、意識せざるを得なかったのだと言える。

そうした文例は、烏のコルバントがライナールトを王様の御前で提訴した場面にある。ライナールトが烏の妻スカルペンエッベを騙して貪欲に食べてしまい、コルバントはそれを遠くから見ていたという。

Doe stont hi haestelic op ende snaude oec so ghyerliken/na mi dat ic des doots anxte beuede  
ende vloech/op enen boem ende sach van verre hoe dat dese valsche/keytijf stont ende at  
soe ghierliken mijn leytuer drijf hi /en liet daer vleysch noch been. 71, 21-25「すると奴は素早く立ち上がってわたしにもすこぶる貪欲に噛みつこうとしたので、わたしは死の恐怖に震えながら木の上に飛んで逃げて、あの悪漢がわたしの癒しの妻を貪欲に食べるところを遠くから見えていました。肉や骨はなにも残さず、……」275, 17-276, 2

キャクストン訳

thenne stode he hastely vp/and raught so couetously after me that for feere of deth/I  
trembled and flewh vpon a tree therby and sawe fro ferre how the false keytyf ete and  
slonked her in so hungerly that he lefte neyther flessch ne bone 52, 34-53, 2

原文にある stont ende at から stont [stood] が省略されて、キャクストン訳では ete and slonked (木村建夫訳「ガツガツと貪り喰って」)に変更された<sup>39)</sup>。原文をふつうに読むと、悪漢のライナールトが立って食べているという印象を抱く。たしかに狐は立って食べていたのかも知れないが、食べる姿勢としてはおかしな表現である。そのため筆者の訳文でも「食べる」と stont の意味を外して訳しておいた。このことはキャクストンでも同様であったようで、そのせいで ete and slonked へ訳し変えたのだと考えられる。stont のもつ「反復ないし継続」という特殊な意味と、その文構造

にキヤクストンは精通していなかった。

最後の第五の文例は、王様が宮廷にやって来たライナールトの弁解に応答した場面である。ライナールトが巡礼袋とその中に兎のキワールトの首を入れて王様に送り返したことに對して、王様が処罰を宣言する。これを聞いてライナールトは恐怖のあまり<sup>すく</sup>竦み上がった。

Doe wert reynaer/soe sere veruaert dat hij niet en wiste te spreken Hem/dochte het woude hem alsoe gaen dat hem alle sijn raet/niet ghebaten en conde. Hi stont ende sach sere ontferme/lijck hi wert bleec ghescaept hi en wist wat te doen hi sach daer veel sijnre maghen diet alle hoerden ende stille/sweghen ende saghen Mer nyemant en boet hem hant noch voet 93, 18-25 「ライナールトはいまや言うべき言葉がわからないほど、竦み上がった。妙案もことごとく役立たないほどの形勢になるかと思った。彼は何とも哀れな格好でずっと見ていた。顔面は蒼白となり、なにをすべきかわからなかった。一族の多くの者が目に入ったが、みな聞きながら静かに黙って様子を見るだけで、彼の手足となって働く者は誰もいなかった。」298, 3-7

キヤクストン訳

tho was reynart so sore aferd that he wist not what to saye/he was at his wittes ende/and loked aboute hym pytously and sawe many of his kyn and alyes that herde alle this but nought they saide/he wa al pale in his visage but noman proferd hym hand ne fote to helpe hym 68, 22-26

この場合も stont が省略されて、訳されたのは第二の定動詞である sach だけで、loked aboute hym へと変更された。やはり前例と同じ事情によって、すなわちキヤクストンが文意からして stont が合わないと考えて、stont が省略されたのだと見なせる。stont を独立した動詞と考えて省略して、また反復なり継続を表現するために別の工夫を試みていなので、前例と同様、彼はこの中世オランダ語の文構造に詳しくなかったと判断できる。

## 5. 結語

本論でもともと問題にした用例は以下の通りであった。前掲した五例と比較すると、それがかなり特殊な事例であるのがわかる。

Recht onder dese woerde dat grymbert aldus van sinen oem stonde ende predicte 11, 30

この文例は唯一、1) 前置詞目的語をもち、2) その前置詞目的語が第一の定動詞および ende の前に位置するものである。それに対応するキヤクストン訳は以下の通りであって、stont に関して原文の stont ende predicte をそのまま stode and preched と逐語訳した点に特徴がある。

Thus as grymbert his eme stode and preched thise wordes, 10, 16-17

結論としてキャクストンは、前置された原文の *van sinen oem* が *predicte* の目的語であるとは理解していなかった。したがって、*preched* の目的語が必要だと考えて、そのあとに *thise wordes* という目的語を新たに添加したのである。原文の文頭に *onder dese woerde* とあるので、これを *preched* の目的語に用いた。新たに *thise wordes* という目的語を添加したために、*van sinen oem* という前置詞句が余剰となってしまった。残った訳すべき文は *grymbert aldus van sinen oem stonde* である。*preched thise wordes* としたことによって生じた空白を、*aldus* [このように] を文頭に出して埋めた。すると *grymbert van sinen oem stonde* だけが残るものの、この文はキャクストンにとって奇妙であっただろう。筆者が当初試みたように苦し紛れの訳にならざるを得なかった。そこでキャクストンは、彼なりに *van sinen oem* から *van* を省略して、*grymbert* と同格に置いて文法的に整合した文を作り上げた。*stode* に単独で「支援する、味方する」という意味があるならば、「彼の叔父を支援する」という解釈も可能だと思われるものの、*stonden* にそうした意味は確認できない<sup>40)</sup>。同格に置いた際に、彼は *his neue* [*his nephew*] とすべきところをそうしなかった。キャクストンにミスがあったとするなら、この部分である。あるいは原文がよく理解できなかったので *his neue* と変更するのを躊躇して、*his eme* をそのまま残したのだとも考えられる。いずれにしても、親族関係が逆転していることに思い至らなかったと言えよう<sup>41)</sup>。

原文の *stont ende predicte* をそのまま *stode and preched* と逐語訳したのは、前掲した例文にもある通り、「立ちながら説教する」という姿勢が単純に「立ちながら食べる」よりも違和感なくイメージできるからに他ならない。

以上の考察によって、『狐レイナード物語』の当該箇所は、たんにキャクストンの誤訳あるいはへまだと考えるよりも、中世オランダ語に独特の文構造をキャクストンがどれだけ理解していたのか、また理解の程度を反映してどのような翻訳がなされたのかを知るための重要な箇所だと見なす方が適当である。従来、『狐レイナード物語』における中世オランダ語からの借用語については多く言及されてきている<sup>42)</sup>。しかしながら、今後は語彙のレベルからだけでなく、本論で論じたように統語論のレベルでもキャクストン訳『狐レイナード物語』が研究されることを大いに期待したい。

## 注

- 1) 日本語で厳密に言えば、父母の兄を指す「伯父」に対して、「叔父」は父母の弟を意味するが、本論ではそうした差異を無視して一律に「叔父」と表記した（『広辞苑』の当該項目参照）。
- 2) それぞれ『狐ライナールト物語』Muller/Logeman 1892:26, 12-13（邦訳『狐の叙事詩』p.226, 15-16）、16, 25（邦訳p.217, 9）、17, 26（邦訳p.218, 10）。以下、『狐ライナールト物語』の出典はMuller/Logeman 1892による。ここに挙げた数字の26, 12というのは、その26頁の第12行に当該引用が掲載されていることを示す。以下同じである。
- 3) 『狐ライナールト物語』Muller/Logeman 1892:80, 13（邦訳p.285, 3）、80, 14（邦訳p.285, 4）。親族語彙を呼びかけとして使うことに関してはMNW V:sp.1609以下のoomの項目参照、またMartin 1874:357 *soete neve*の項目を参照されたい（指摘は前引用箇所による）。
- 4) 『ライナールト物語』3852行では、穴熊のグリムバールトが狐のライナールトに「親愛なる甥よ」と呼びかけている。刊行本では校訂によって「親愛なる叔父さん」と変更されている箇所である。Wackers 2002:175, 426（邦訳p.92, 3）参照。
- 5) 精確な成立時期は不明である。ここでは『狐の叙事詩』にある成立時期をあげておく。ただこれも推定である。『狐の叙事詩』p.457参照。
- 6) ヘラールト・レーウとキャクストンの関係については『狐の叙事詩』p.483以下を参照されたい。

- 7) Sands 1960:202 注 18.
- 8) 『狐ライナールト物語』 Muller/Logeman 1892 による。ここに挙げた数字の 11, 30 というのは、その 11 頁の第 30 行に当該引用が掲載されていることを示す。下線は筆者による。またスラッシュは改行を示す。いずれも以下同じである。
- 9) 『狐ライナールト物語』の日本語訳の出典は『狐の叙事詩』2012 年である。
- 10) キャクストン訳の出典は Blake 1970 による。
- 11) Sands 1960 による。
- 12) 出典は以下の訳本である。ウィリアム・キャクストン訳『きつね物語』—中世イングランド動物ばなし 木村建夫訳 二〇〇一年 南雲堂
- 13) Sands 1960:202 注 18. 注の原文は以下の通り。“*Grimbert, his eme. A blunder on Caxton’s part; Reynard is Grimbert’s uncle. Caxton translated the van sinen oem (concerning his uncle) of the Gouda edition as an appositive.*”
- 14) Blake 1970:116 注 10/16. 注の原文は以下の通り。“Caxton has mistranslated the Dutch, which has that Grimberd was speaking about his uncle (P 219-21). Caxton has made it seem as though the badger is Reynard’s uncle, but the relationship is the opposite. (cf.12/7)” P 219-21 というのは、Hellinga によって刊行された『狐ライナールト物語』の当該箇所を、また 12/7 は、『狐レイナールト物語』第六章冒頭の、王様が穴熊に向かって、ライナールトを穴熊の叔父と呼んでいる箇所を指している。
- 15) ウィリアム・キャクストン訳『きつね物語』314 注 15. (10/16) というのは、ブレイク版の『狐レイナールト物語』において当該の文例の掲載箇所を示している (10 頁第 16 行)。
- 16) MNW VII :sp.1867.
- 17) MNW VII :sp.1868-1869.
- 18) Stoett 1923 (1977):12.
- 19) オランダ語の *bepaling van gesteldheid* を各国語で何と言うかを表した一覧によった (van den Hoek et.al. 1988:8)。 *bepaling van gesteldheid* は *praedicatieve attributen* とも言い換えられるという (den Hertog 1897-1898 (1915):58)。
- 20) den Hertog 1897-1898 (1915):pp.58 また、den Hertog 1973:p.120-129 参照。たいていの場合四、五例掲載されている例文の一部を本論で掲載した。筆者が恣意的に選んでここに挙げている。
- 21) イタリック体は、原著者が述語的修飾語を示すために字間を開けて強調した部分を示したものの、対応する日本語訳および下線は筆者による。
- 22) van den Hoek et.al. 1988:9.
- 23) ANS (Algemene Nederlandse Spraakkunst) 1984:pp.537.
- 24) ANS 1984:538.
- 25) ANS 1984:538.
- 26) 筆者の補足に [ ] を用いた。以下同様である。
- 27) MNW II :sp.638.
- 28) Of Reynaert the Fox 2009:115.
- 29) Stoett 1923 (1977):p.12-13.
- 30) 下線部は筆者による。以下の文例も同じ。Stoett によるいま一つの著書には、このおなじ例文のあとに (Amand) と出典の明記がある (Stoett 1889:121)。『中世オランダ語辞典』(MNW) (I 巻冒頭) の出典一覧によれば、これは *Leven van Sinte Amand, patroon der Nederlanden, uitg. der Bibliophilen, 2 dln. 1842* だという。
- 31) 具体的な出典は Stoett には明示されていないものの、同じ文例が MNW VII :sp.1172 の *sitten* の項目にある。それによると出典は *Mémoires sur la ville de Gand, uitg. door Ch. L. Diericx, Gent 1814. 2 dln., 2, 486* だという。
- 32) Stoett 1923 (1977):p.13, Opm.
- 33) MNW VI :sp.641-642.
- 34) MNW VI :sp.642. MNW の第 X 巻に所収されている *Bouwstoffen 2dln. p.425, 256* によると、Sev. Blisc.

- は *De sevenste bliscap van Maria. Mysteriespel der XVde eeuw.* uitgegeven op last der Koninklijke Vlaamsche Academie voor Taal- en Letterkunde door K. Stallaert. Gent, A. Siffer en Cie, 1887. のこと。また、同辞典の後半では、P. Leenderts: *Middelnederlandsche dramatische poëzie.* Leiden 1897 によるという。Leenderts1897: 第1巻349、第667-668行参照。
- 35) MNW VI :sp.642. MNW 第V巻冒頭にある ELFDE AANVULLINGSLIJST DER BRONNEN によれば、*Marialeg.* とは *Middelnederlandsche Marialegenden, vanwege de Mij. der Nederlandsche Letterkunde, uitgegeven door C.G.N. de Vooy, 2 dln. 1902 en 1903* のことだという。
- 36) 出典は Muller/Logeman 1892 である。原文の後に付された 8, 24-26 という数字は、それが 8 頁の 24 ~ 26 行にあることを示している。また引用符内の日本語訳は『狐の叙事詩』1012 年によった。
- 37) 出典は Blake 1970 であり、改行を示すスラッシュは Blake 1970 にある原文における改行をそのまま掲載した。以下同じである。
- 38) Stoett 1923 (1977):13. そこには英語の例として She sits and spins., He stood and looked., He lay and sobbed bitterly. が挙げられている。
- 39) ウィリアム・キャクストン訳『きつね物語』84, 1-3. slonked の意味については Sands 1960:209-210 注 131 参照。
- 40) *Middle English Dictionary.* editor-in-Chief Robert E. Lewis, Review Editor Mary Jane Williams, Ann Arbor 1991 The University of Michigan Press, Part S.15, 788-81, stōnden の項目参照。
- 41) ちなみにほかに一箇所で見族関係を逆にした例が指摘されている。ライナールトが甥のグリムベルトに懺悔する場面でライナールトが甥を「叔父さん」呼んでいるものの、原文は「甥」である。原文は kyr lieue neue grymbart 「<sup>キリエ</sup>主よ、愛しい甥よ、グリムベルトよ」(36, 21 邦訳 238, 10) であるのに対してキャクストン訳は Ach dere eme (27:31-32) である。指摘は Blake 1964/1964:307 による。
- 42) たとえば Blake 1970:xxiv-xxvii 参照。

## 参考文献

- Algemene Nederlandse Spraakkunst (ANS).* onder red. van G. Geerts et. al. Groningen/Leuven 1984.
- Blake 1963/1964: N.F.Blake, William Caxton's Reynard the Fox and his Dutch Original. In: *Bulletin of the John Rylands Library* 46 (1963/1964) 298-325.
- Blake 1970: N.F. Blake (ed.), *Caxton The History of Reynard the Fox.* Oxford University Press London/ New York/Toronto 1970.
- Hellinga 1952: W. Gs. Hellinga (ed.), *Van den Vos Reynaerde. Deel I Teksten.* Diplomatisch uitgegeven naar de bronnen vóór het jaar 1500, Zwolle 1952.
- den Hertog 1897-1898 (1915): C.H. den Hertog, *De Nederlandsche taal. Practische Spraakkunst van het hedendaagsche Nederlandsch.* eerste deel. eerste druk 1897-1898, vierde druk 1915, Amsterdam 1915.
- den Hertog 1973: C.H. den Hertog, *Nederlandsche Spraakkunst.* ingeleid en bewerkt door H. Hulshof, eerste stuk, de leer van de enkelvoudige zin, derde bewerkte druk, Amsterdam 1973.
- van den Hoek et.al.1988: Th. van den Hoek/J. Houtman/J.Jullens, *Grammaticaal Woordenboek. Termen en begrippen van de traditionele grammatica en hun equivalenten in het Latijn, Duits, Engels en Frans.* Leiden 1988.
- 『きつね物語』—中世イングランド動物ばなし ウィリアム・キャクストン／木村建夫訳 二〇〇一年 南雲堂
- 『狐の叙事詩』『ライナールト物語』『狐ライナールト物語』檜枝陽一郎編訳・読解 2012年 言叢社
- 『広辞苑』第三版 第二刷 東京 昭和五九年 岩波書店
- Leenderts 1897: P. Leenderts, *Middelnederlandsche dramatische poëzie.* 2 dln. Leiden 1897.
- Martin 1874: Ernst Martin, *Reinaert Willems gedicht van den Vos Reinaerde und die Umbearbeitung und Fortsetzung Reinaerts Historie.* Paderborn 1874.
- Middle English Dictionary.* editor-in-Chief Robert E. Lewis, Review Editor Mary Jane Williams, Ann Arbor 1991 The University of Michigan Press, Part S.15.

- MNW = 『中世オランダ語辞典』 E. Verwijs/J. Verdam, e.a.: *Middelnederlandsch Woordenboek I – XI*. 's-Gravenhage 1885-1952.
- Muller/Logeman 1892: J.W.Muller/H. Logeman, *Die Hystorie van Reynaert die Vos, naar den druk van 1479, vergeleken met William Caxton's Engelsche vertaling*. Zwolle 1892.
- Of Reynaert the Fox, Text and Facing Translation of the Middle Dutch Beast Epic van den vos Reynaerde*. Edited with an introduction, notes and glossary by André Bouwman and Bart Besamusca. Translated by Thea Summerfield. Includes a chapter on Middle Dutch by Matthias Hüning and Ulrike Vogl. Amsterdam University Press, Amsterdam 2009.
- Sands 1960: Donald B. Sands, *The History of Reynard the Fox*. Translated and printed by William Caxton in 1481. Edited with an Introduction and Notes by Donald B. Sands, Cambridge/Massachusetts Harvard University Press 1960.
- Stoett 1889: *Beknopte Middelnederlandsche spraakkunst Syntaxis*. 's-Gravenhage 1889.
- Stoett 1923 (1977): *Middelnederlandsche Spraakkunst Syntaxis*. derde herziene druk, vijfde oplage 1977, eerste oplage 1923, 's-Gravenhage 1977.
- Wackers 2002: Paul Wackers, *Reynaert in Tweevoud deel II Reynaerts Historie*. Amsterdam 2002.

(本学文学部教授)